

13
1989

南北太平記圖會卷之二

初篇

目錄

御ニ隱ニ謀ニ再ニ發ニ覺ニ鎌ニ倉ニ
 感ニ敷ニ寫ニ道ニ範ニ貞ニ赦ニ為ニ明ニ
 圓ニ觀ニ文ニ觀ニ忠ニ圓ニ引ニ鎌ニ倉ニ
 圓ニ觀ニ文ニ觀ニ忠ニ圓ニ所ニ流ニ刑ニ
 俊ニ基ニ二ニ被ニ捕ニ六ニ波ニ羅ニ
 俊ニ基ニ重ニ下ニ向ニ鎌ニ倉ニ
 高ニ資ニ進ニ論ニ定ニ是ニ非ニ
 資ニ朝ニ書ニ頌ニ受ニ殊ニ戮ニ
 孝ニ子ニ討ニ父ニ讐ニ逃ニ危ニ



驗者祈船救阿新
 武家議事殊俊基
 助光收骨登高野山
 天地起怪異示前相
 主上密遣落内裏
 偽臨幸師賢登叡岳
 山門惡僧鬪辛寄濱
 臨幸非實山徒變虛
 兩門主退八王寺屯

南北太平記圖會卷之二

初篇

御隱謀再發覺鍾倉

感鋪島道赦為明卿

樹下幽溪小事と被すも聲猶石より。深窓閑室に細語となくも耳既に壁にけり。是揚震が四知の外るんや。事の漏易まゝ禍を招く媒なまハ大塔宮の御行事。中原章房横死の趣意。又ハ禁裏におのゝ調伏の法と被行し事共。二に鎌倉へ聞へてぐり。相換入道大に怒てやく。此君御在位の程ハ天下安全なり。守所詮承久の例に任て君と遠國へ遷し奉る。大塔宮を死罪不處し奉るべき也。先近日殊に龍顔不咫尺奉て當家と調伏し給入なり。法勝寺の圓觀上人。小野の文觀僧正。浄土寺の忠圓僧正。南都の知教教圓の二律師を召捕り子細と相尋べし。巳に武命と合て。二階堂下野判官。長井遠江守二人鎌倉より時日

と移る上洛せしむ。又如何なる荒き沙汰を致さむと。王上と
宸襟を惱まれり。處に五月十一日の曉雜賀集人使と使して法勝寺の
圓觀上人小野の文觀僧正。浄土寺の忠圓僧正。三人と六波羅へ召捕り此
中に忠圓僧正ハ。顯宗の碩徳なりし。調伏の法行なりと云其人數ハ
入りし。是も此君ふ近付奉て。山門の講堂供養以下の事。万づ直
に申沙汰せしむ。衆徒共力の事此僧正も存せしめ事ハ。つじ
とて。同く召捕り給ひふり。是の事ハ。以知教教圓の二人を南都より
召捕りて同く六波羅へ出給へ。又藤の中將為明卿ハ。歌道の達者として月
夜雪の朝褒貶の放合の御會ハ。召きて。宴に侍する事。隙をり。が
ら。なる嫌疑の人とハ。なるとし。厭慮の趣と尋問む。め。是も
六波羅へ召捕りて。齊藤某ハ。預る。五人の僧達ハ。元來謙倉へ召下し
て沙汰せしむ。條六波羅にて尋ね窮に及ぶ。為明卿ハ。おろそか

京都にて尋ね沙汰せしむ。白狀の上關東へ。注進す。として檢斷に仰て已
に。嗚問の沙汰に及ばむとす。依之六波羅の北の坪ハ。炭と起す事。鑊下爐
壇の如く。其上に青竹を破り敷雙ハ。隙と明らり。くれハ。猛火を
吐く烈く。朝夕雜色左右に立雙て。為明卿の両手を引張て
其上を歩せ奉ると支度。たり有様ハ。只四重五逆の罪人の阿鼻燒
熱の空に身と焦り。牛頭馬頭の呵責に逢ふ。角社にめと覺へく。
見ても肝ハ消ぬべし。為明卿是を見給ひて。いと靜に硯や。つらと尋ね
く。白狀の爲り。として硯小料紙を取添て奉り。くれハ。白狀ハ。つら
一首の歌を。書れけり。

かみひさや我敷嶋の道。浮きのこと。同く。として
常兼駿河守範貞。此放を見。感歎肝に銘。くれハ。泪を流して。理不
伏す。東使二階堂長井の兩人。是を續て。諸共。袖を浸。くれハ。為明卿



ハ火烙の責と免れて咎なき人ふ成にけり。詩教ハ朝廷の翫宴弓馬ハ武家の嗜む道なれば其慣ふ未だも。六義數奇の道は推方りゆれども。物類相感ずる事皆自然なれば。此教一首の感は依り敬問の責を止めり。東夷は心中こそやきしけれ。力とも入らずて天地を動し。目に見ぬ鬼神も哀と思はせ。男女の中きも和らげ。猛き武士の心とも慰むらハ教なりと。紀貫之が古今の序に書たりしも。理りなりと覺る。又同年六月東使三人の僧達と具足し奉て。關東に下向す。沙汰たりけり。彼忠圓僧正と申ハ淨土寺の慈勝僧正の門弟とて。十題判断の登科一山無雙の碩學なり。又文觀僧正とハ元ハ播磨國法華寺の住侶なりしが。壯年の比より醍醐寺に移住して。真言の大阿闍梨たりけり。東寺の長者醍醐の座主に補せられ。四種三密の棟梁なり。圓觀上人とハ元ハ山後より御座りけり。顯密兩宗の才。一山ハ光りけりと疑れ。智行兼備の譽。諸寺に人なきが如し。然れども

夕々山門澆漓の風小随り。上慢の幢高よりて。遂に天魔掌握の中に落ぬ。不如公清論場の聲譽と捨て。高祖大師の舊規小歸り。なんと。一度名利の響と返して。永く寂莫の苔の扉と閉初の程ハ西塔の里谷小居とトて。三衣と荷葉の秋の霜に重祓。一鉢と松華の朝の風小任せおろけり。徳不孤必有隣と其光明藏さるりければ。遂に五代聖主の國師として。三聚淨戒の太祖たり。三人ともかろ有智高行の尊宿たりといへども。時の横災とハ遁れ給りぬ。や。又ハ前世の宿業とや。依りて遠垂の囚と成り。逆旅の月小ます。ひ給ふハ不思議なりし事共也。より。圓觀上人計を宗印圓照道勝とて。如影隨形の御弟子三人輿の前後小供奉しけり。其外文觀僧正忠圓僧正ふハ相隨ふ者一人もなくて。怪げなる店馬小乗せりて。見馴ぬ武士より打圍き。や。夜深きに鷄鳴東の旅小か給ふ心の中こそありけり。

なりくり

圓觀文觀忠圓引鑑倉

流刑圓觀文觀忠圓

去程小三僧ハ六月八日とつふ小京六波羅と出れり。鍾倉をても下り着
む。路次して失ひ奉るゝなど聞へし。彼の宿に著ても今や限なくん
此の山に休めば是や名残なくんと露の命の有程も心先へ消ぬべく思ひ
つみて。昨日も過今日も暮ぬと行程に。我とい急ぐぬ道なれど日敷積は
同月廿四日鍾倉ふこそ着に。圓觀上人とバ佐介越前守。文觀僧正とバ佐
介遠江守。忠圓僧正とハ足利濱岐守と預けり。二階堂長井の兩使歸
参して彼僧達の本尊の形爐壇の様畫圖小寫し。注進す。俗人乃見
知へ事。事。佐々目の頼禅僧正と請して是と被見しに。子細るま
調伏の法也と申されり。去バ此僧達と噉問せよと。侍所よ渡して水
火の責と及り。文觀僧正暫り程ハ何小問きりれども落給はざりり。

水問重りけれハ身も疲と心も弱くさうり。勅定小依て調伏の法と
行ふ。條子細なりと白狀せり。又忠圓僧正と噉問するに。此僧天性臆
病の人とておろくれハ未責先主上山門と御語ひありし事。大塔の宮の
御振舞。後基の密計なんと有もゆぬ事。残り所なく白狀一卷ふ
載せり。此上ハ何の疑ひ有べきなれども。同罪の人なれば。閣へさまつ。後
圓觀上人も噉問小懸奉るべしと評定ありり。其夜相摸入道の夢
小比叡山の東坂本より。猿共三千群て来りて。此上人と守護し奉る
体して並居り。と見給へ。夢の告只事なすと思はれ。未明。預人
の許へ使者と立ち。上人噉問の事。暫く閣へ。と下知せり。夢小預人佐
介越前守。遮て相摸入道の方。来。さ。る。ハ。上人噉問の事。此。既
小其沙汰致し。ハ。む。ら。に。上人の御方へ。参。く。ハ。燭と挑。く。觀法定座
せりて。其御影後の障子に移て。不動明王の貌小見させ給ひ。つら

間驚き存て先事の子細と入んふに推参仕ていとどける。夢起
と云示現と云只人よりくばとて嗽問の沙汰と止れり。同き七月
十三日此僧達遠流の在所定つ。文觀僧正と硫黄が嶋忠圓僧正と
越後の國へぞ流されり。圓觀上人計と六遠流一等と宥て結城上野
入道に預れり。領地奥州へ具足一奉。其名ハ左遷遠流と云ふ
計して長途の旅ふさるひ遠壘の外に遷されさせ給へ。是も同し思ひ
して大唐の聲法師が刑戮の中苦き一行阿闍梨の火羅國に流され
し。水宿山行の悲しむもかくを思ひあはれり。名取川と過させ給へ
とて。上人一首の教と讀みひり。

陸奥のうま名取川流まきて沈やるとん瀬々此埋木

時の天災とハ大権の聖者も遁ま給はざるや。昔波羅奈國に戒淨惠
の三學と兼備へる。一人の沙門おりり。一朝の國師とりり。四

海の倚頼よりしり。天下の人歸依渴仰せる事。恰も大聖世尊の出世成道
のしく也。或時其國王法會と行ふ事あり。説戒の導師は此沙門と
を清せり。沙門則勅に隨く鳳閣の参内す。折節王二人の碁打と召
て碁と圍せて御覽りり。所へ傳奏沙門参内の由と奏し申るに。王碁
小心と入る。是と聞食れず。碁の手は付て。截へりと助語しひり。傳
奏聞たぐく。此沙門と斬との勅定ぞと心得て。禁門の外へ引出し。則沙
門の首を刎てり。王碁も後沙門と御前へ名れり。傳奏已よ
勅定に隨ひ典獄の官お申て。首を刎りと奏す。王大逆鱗在
て宣く行死定て三奏すといへり。而も一言の下に誤りて行ふ。朕が
不徳をかきぬ。罪大逆小同しとて直し傳奏の官と三族の罪に行
まきり。扱此沙門罪なくして死刑小逢りひゆる事。前生の宿業とて
やかりしと思食れり。王其故と阿羅漢に問給へ。阿羅漢七日が

間定に入。宿命通と以て其過現と見給ふ。沙門の前生ハ耕作と業と
する田夫也。王の前生ハ水不す蛙なり。此田夫鋤と持て春の浅田とかへし
る時誤て鋤の先と蛙の頸とを切りたる。今の沙門ハ其時の田夫なり。大
王ハ其時の蛙なり。此因縁と曳て今また誤て首と刎られたること申され
る。波羅奈國の大王も因果業報の逃さざるを悟て宿命通と得
て去ハ圓觀上人も何なる修因感果の理に依て斯る不慮の罪に
沈み給ひぬんと理りせめて哀れなりなり

俊基重被捕六波羅

俊基二下向關東

爰に俊基朝臣ハ先年土岐頼貞多治見國長が討まり時召捕れて鎮
倉にて下て給ひりり。御告文の不思議に依て赦免せられり。しが
又今度忠圓僧正の白状より専ら隱謀の企彼朝臣にありと載られた
る。これハ七月十日又六波羅へ召捕きて關東へ送られり。再犯不赦ハ法令

の定する所らん。何と陳するとも許されず。路次を失り。鎮倉と斬り
し。これ此の間と離れず。思ひ儲て出る心の中こそやせなれ。時其時
は。落花一片の雪と踏片野の春の櫻狩。紅葉の錦衣て。吸る嵐の
山の秋の昏一夜と明以程。旅とおへハ懶に。まじりや恩愛の契り
浅く。妻子と跡に残し。置年頃日頃す。かゝるハ九重の故郷と
今や限と見返りて。かゝる憂目。相及の關の清水。影を。鞭と打
出の濱づゑ。駒も轟と踏鳴す。勢多の長橋打渡り。行向人。近江
路や世の。の野。啼鶴も。子と思ふ。闇。ちや。て。時雨も。つ
森山の。木下。陰ハ秋更。て。風。に。露。ち。篠原。や。篠。分。道。を。過。り。て。
鏡の山ハ。あ。り。か。が。り。い。と。心。の。曇。り。も。泪。せ。れ。あ。ん。愛。知。川。や。老。獲。の
森の。寢。覺。に。も。思。ひ。り。て。つ。つ。と。都。ハ。雲。小。隔。と。て。番。場。醒。井
拍原。不。破。の。関。屋。ハ。荒。果。て。猶。も。物。ハ。袖。の。雨。つ。り。我。身。の。尾。張。



并び高時
 夢坂本
 数千の株来
 僧正と守
 護
 見へし
 図



圓觀僧正夜終
 行いすありし影
 の障子よりつて
 不動明王の
 形顕る図

る熱田の八剣伏拜。何に鳴海の浦千鳥傾く月小道まで明ぬ
くれぬと行程に未はいつこと遠江濱名の橋の汐風も身ふりしと
晚鐘の響よつれて今ハとて池田の宿を著り入る。されバ元暦元年の
むろ重衡中将源氏の為囚まで此宿に著りしは東路の丹生の
小屋のよせせぬ。故郷いくに戀りあふると長者の女が讀たりし其古
の来花も思ひ残さぬ泪こり。旅館の燈幽くして雞鳴曉を催せ
ハ匹馬風小嘶ひて天龍川を打越小夜の中山ハ白雲路を埋来てそこ
とあふ波且暮に家郷の天と望ても昔西行法師が命なりけりと
詠二度越一跡も。浦山敷ぞ思われけり日己に亭午よ昇れば
餉進す程とて輿と庭前よ昇止む轅と叩て警固の武士と近付て
宿の名を問ひふ菊川と答へくれハ過一承久の兵乱ハ院宣書
たりし咎よ依て中御門宗行卿関東へ召下され此宿と誅せ

うれしき時

昔南陽縣菊水 級下流而延齡
今東海道菊河 宿西岸而終命

と書し遠き昔の筆の跡も。今ハ我身の上よ成ゆと哀やと増
そん一首の歌と詠し宿の柱を書れり

いあつてもわかれぬと菊川のお竹流し身を沈めむ

大井河を越て都よりし名をなう。亀山殿の行幸嵐の山の
花盛り龍頭鷄首の舟に乗詩歌管絃の宴に侍り事も今そ二
度見ぬ世の夢と思ひつけて島田藤枝よ懸り岡邊の真葛東枯
て物悲しき夕ぐれ。現よ宇都の山邊を越えハ葛楓いと茂りて道
もなう。其昔業平の中將の住所を求むと東の方に下り。夢やも
人よ逢ぬなりけりと讀ししもかくやと思ひあられ。清見深しハ

波の関守をこめて。都へ及る我夢を通さば向へばいつ三穂がら地興
津神原の間より富士の高根を望みて雪の中より立烟と上るる身の
非きに比べ明る霞に浮島が原を過てハ浮森の鳥のさためなき床を移
替り椽の思ひよとり下立田子も自ら憂世を遠る車返り竹の下道行るや
む足柄山は差かり大磯小磯直下して袖も浪はるるの濱の砂子のくしてし
うさ。旅の日數も積り来て。漸く七月廿六日の夕影は鍾倉へ下着りぬく
其日聽て南條左衛門高直請取奉て評訪左衛門に預らる一間なる所ふ
蚊手まひく結て押籠奉る有様ハ只地獄の罪人の十王の廳に渡され
頭械手扱と入られて罪の輕重を糾さるるもかく申と思ひ知さるる

高資進論定理非

資朝書頌受誅戮

主上の御隱謀事露頭の後御位ハ定て持明院殿へ進らんずんと其近習
の輩青女房小至るまで悦ある所ハ土岐多治見討り後も曾て其沙

汰もす。今又俊基召下されぬれども。御位の事はおのてハ何る様子も
聞へざりけれバ持明院殿附の人々案に相違して五噫と謳者多りたり。
去バ免角申進むる者もつりたりや。持明院殿より内々鍾倉へ御使と下
されて當今御隱謀の御企近日事已に急なり。武家連に弘明の沙汰な
くバ。天下の乱近きに有べしと仰遣されたりけれバ。相摸入道實もと驚宗
徒の一門并は頭人評定衆を集て此事如何あるべしと各の所存を問れくれと
も。或ハ他小讓て口を閉又ハ已と顧て言を出す者一人もなれ所ハ。執事長崎
圓喜入道。嫡男新左衛門尉高資進出て申るハ先年土岐頼貞多治見
國長が討り時。主上の御位を改め申さるべしと。朝憲は憚つる御沙汰緩
やがりしに依て此事猶未休乱を撰て治を致ハ。武の一徳也速りに主上と
遠國小遷り奉り。大塔宮と不返の配流は慶し進らせ。資朝俊基以下の
乱臣と一々誅せり。外ハ別儀あるべし。後存候と憚る慶る申る

と二階堂出羽入道道蘊暫思案と申々るハ此儀尤然るべく聞へども退ひ
て愚案を廻らば抑武家権を執て既百六十余年威四海及び運業
を耀す事ハ更に他を唯上人を仰奉て忠貞を私るく下百姓を撫育し
て仁政を依估るが故也然る君の寵臣一兩人を召捕置れ御依の高
僧兩三人を流刑に處せり條武臣惡行の專一と謂べし此上も猶主上を遠
所に遷し奉り天台座主を流罪に行せん事山門の大衆争り憤りて令
るべしや夫のなきが天道者と思ひ神怒り人背りハ武運危きに近
へしといふ君雖不君不可臣以不臣と云り君綴ひ御謀教と思食立
とも武威盛るん程ハ典し奉る者有べし是に附ても武家弥慎く
勅命不應するも君もなき思食直るるべしやかくてこそ
國家の泰平武運の長久とも申べく存するなり面々如何思ひ
はと申々ると長崎新左衛門尉又とや自餘の意見も不待以

の外ハ氣色を損じて申々るハ二階堂殿の仰る事なかり文武の揆
一也といども用捨時異るべし静なる世ハ文を以て弥治め乱る
時ハ武を以て急静む故に戰國の時ハ孔孟不足用太平の世
ハ干戈似無用事已ハ急に當る速に武を以て治むべかり異朝
に周の武王臣として無道の君を討し例たり吾朝ハ義時下と
して不善の主を配流するなり世皆是を以て當りたりそれハ古
典も君視臣如土芥則臣視君如寇讐といひ事停滞して武家
追罰の宣旨を下されば後悔なきも益あるべかり只君と遠國に遷
し奉り大塔宮と硫黄島へ渡り進らせ隱謀の逆臣資朝俊基を誅せ
るより外の事あるべかり武家の安泰此儀はあらずと存し居
長高は成て申々るハ當座の頭人評定衆其權勢は阿まらむ又
其愚案もや落ん皆此義は同くれば道蘊再往の忠言に及ばず眉



俊基^{とよもと}
朝臣^{あそ}
再^{また}比^ひ鎌倉^{かまくら}へ
下^か向^む之^の図^ず



と聲りて退出す。去程に君に御謀叛を申勧ぐる。日野中納言資朝同右
少辨俊基源中納言具行也各死罪に行るべしと評定一途に定て先去年
より佐渡國へ流されたり。資朝の卿を斬奉るべしとて。其國の守護本
間山城入道は下知せらる。此より都に聞へければ。資朝卿の子息國光の中
納言其頃ハ阿新丸殿とて歳十三とをたより。父の卿名人は成るべし
より。母と共に仁和寺の邊に隠れ居られ。父誅せられしを承りて
聞。今ハ何事に命を惜べ。父が最後の御有様を見奉り。又ハ眞
途の振も伴ひ進せむとて。母御前より御暇を乞はる。母御前ハ大
驚き頻に諫て申さる。様其佐渡と申す人にも通らぬ怖しき息と
こそ聞つれ。殊に日敷と経道なれば。幼き身して何より下らぬべし。
其上父御に離進を。又汝は別れて一日片時も命存るべしと覺
すと。痛く泣悲しめて止り申されれば。阿新首うちりていやと

父君の御大事と聞きて。暫も思ひ止まる心はなす。や伴ひ行人も
よく又御赦しなく。何より例瀬も身と投ぐ死なんと申え
る。間母ハ此上強て止め。又目の前に憂別もあり。思ひ侘て
力なく。今まで只一人付副る中間と相添られ。遙と佐渡國へ下され
る。路遠く。乗べき馬もなれば。もさも習わぬ草鞋は菅の小
笠と傾けて。露分わける。越路の旅。思ひ中を哀れり。都と出て
十日餘と申に。越前の敦賀の津に著て。是より商人舟に乗る。
程多く佐渡國に渡り人として右とつべし。便もなれば。自ら本間が
館に至り。中門の前に至る。境節一人の僧の有り。此内への御
用として御立。又何を御用として。問尋くれば。阿新丸おとれし中
に。是ハ日野中納言の一子に。父近來斬れさせ給へしと承つて。
其最後の様とも見いひ。都より遙々と尋下りて。亡も

へず泪とくく流されぬ。此僧心より者として急に内へ入。此
由と本間入道は語ふ本間も岩木なまの流石哀しや思ひん。聽て
此僧と以て持佛堂へ誘ひ踏皮行纏解せ足と濯せ疎まぬ体とを置
たり。阿新殿は是と嬉しと思ふ付ても同くハ父の卿と疾見
奉バヤと申されぬれども。今日明日に斬る人ふ是と見せ奉て中
々冥路の障も成り。又鍾倉の聞へも如何なりとて。四五町隔て
る處に置て更に父子の對面と許さず。父の卿ハ風は是と聞て我子の
遠き都よいづ存ぐんと思ひず。尚悲しきまてや面前へ遙々来
るものと相見ざる心の遣方なき。譬ていん様もなし。子ハ又我父の浪路
遙に隔りし鄙の住居と想像て心苦く思ひつる。今其國よ来がら一
言もかり奉らぬ悲し。更に袂の乾くひぬも。是を中納言のおり
ます籠の中よとて見やれば竹の一群茂る所に堀り廻し堀と塗て行通

人もる様なり。情の本間心や。父ハ禁宰せられ子ハいま推し。縦
一所に置たりとも何程の怖畏うらむ。對面とに許さ。同く世
の同く地小在る。生と隔るが如く。命なぐん後思ひ寐の夢
小相見ん事も有がごと。互悲しむ恩愛の父子の道こそ哀れ
かれ。五月二十九日の暮程小資朝卿と宰り出奉りて遙に御
湯に召れぬ。御行水々へと申せ。早斬るべき時に成よりと思
ひ給ひて嗚呼して。事くれ。我最後の様と見ん。遙々と尋
ね下つる少き者と一目も見ず。終る事と計宣ひて。其後ハ
諸事よ付ても曾て言さも出給。今朝までハ氣色あられて
泪と押拭ひ給ひ。人間的事よ於てハ頭燃と拂ふ如く。成りて
覺へ。只綿密の工夫の外ハ餘念ありとも見へ給はず。夜ふハ薬
一寄り乗奉り。爰より土町計り河原へ出奉り。薬昇居

とバ少しも臆しる氣色も無く。敷皮の上より居直して。辞世の頌を書し給ふ。其頌よ曰

五蘊假成形 四大今歸空 將首當白刃 截斷一陣風

年号月日の下に名字と書付て筆を閣よりハ切手後へ田とぞ見へし。御首ハ敷皮の前へ落て。質ハ尚座せり。如し。此程常は法談と一のハく僧來つ。葬禮如形取營。空し骨と拾て。阿新殿は奉てくれ。阿新是と一目見く取手も撓て倒伏。今生の對面遂に叶はして。替へるハ白骨と見奉る事として。声も惜まず泣悲まこと。理り責て哀れり。阿新い。幼稚れともくけ。所存かい。くれ。父の遺骨を伴ひ來り。中間は持せて母は送り。其上高野山。參て奥の院に收むべし。懇言含めて都に及。我身ハ勞る事巧る。尚本間が館に留てくる。

孝子討父警逃危

驗者祈船救阿新

叔も阿新丸ハ本間が情ろ。父と今生めて我に見せり。鬱憤を散せんと。思われ。父の勞を偽て跡に止。角て四五日経る程。晝ハ終日。打卧夜ハ忍びず。みゆけ出。本間が寢所と細々と伺。隙ハ彼入道。父子間一人と刺殺。腹をえす。物と思ひ定めてぞ。見れ。或夜雨風烈く吹て。番す。郎等も皆遠侍。いと聞り。くれ。今こそ待處の幸いと。思ひ。忍びて。本間が寢所の方を窺ふ。本間入道。運や強り。ん。今夜ハ則所を替て何に。り。とも。こハ何。と思ひ。二間。ろ。所ハ燈の影の見へ。と。若入道。子息。ある。ん。是なり。とも。討。恨。と散せんと。ゆけ入。て。熟見。る。に。夫。ま。愛。ハ。ハ。以。して。中納言殿と斬奉。是。本間三郎。と。り。者。こ。を。聞。り。る。う。や。是も時。取。て。父の敵。なり。山城。ハ。道。ハ。歩。る。ま。と。思。ひ。く。走。て。か。

らんとする。我ハ元来太刀も刀も持た。唯彼が太刀を我物と憑る
一燈殊小明うかれバ。立寄ハ躰て驚き合事とや巧んくと危して
左右もくも近寄得ず。何うせん。案じ煩を立りたるに折節夏の
事をねバ。燈の影とまひて蛾とり。虫の明り障子に取附る。こと
究竟の事こそあれと。障子と少し引おけられバ。此虫あや内へ飛へて
躰く燈を打消ぬ。今ハ右と嬉しくて三郎を枕よ立寄て探るに。太刀
も刀もそこに在く。主ハよく寝入り。先刀を取。腰よ差。太刀を
抜く心よ。指當るが。寝る者と殺すハ死人よ。同くれば。驚きんと
思ひて。足よ枕とよと蹴。蹴られて驚く。西よ一の太刀よ躰の上
と置。つと変通。返す太刀よ喉ぶへと搔切て。心閑。後。竹
原の中へぞかれ。三郎一の太刀よ買。れてあつと叫ぶ。声よ番
の者とも驚き。騒て火と燃。是と見るに。血の付。少。足跡の

て。扱ハ阿新殿の仕業なり。堀の水深。くれバ木戸より外へハも出。探
出して打殺せ。て。手よく。松明とよ。つれて。木の下草の陰。ま。こ
残。處。を。尋。り。阿新ハ竹の中よ。かれ。今ハ何地へ。遁。る。べ。し。
人手よ。か。らん。より。ハ。速。よ。自。害。セ。バ。中。と。思。れ。り。が。悪。し。と。思。ふ。親。の。敵
ハ。討。り。此。上。ハ。何。も。し。て。命。を。全。り。君。の。御。用。も。立。父。の。素。意。と
も。達。し。母。の。先。途。を。見。届。な。ば。忠。臣。孝。子。の。義。も。立。べ。し。と。思。ひ。く。へ。し。
一。つ。ら。遁。り。て。見。し。争。と。て。堀。の。辺。へ。出。し。れ。ハ。口。二。丈。深。一。丈。より。り
より。堀。を。れ。バ。越。べ。し。様。も。う。り。り。り。こ。う。バ。是。と。橋。よ。し。て。渡。つ。て。こ
んと。思。ひ。て。堀。の。上。よ。末。な。び。さ。り。吳。竹。の。あり。り。り。身。が。く。へ。し。て
其。梢。へ。さ。り。と。登。り。され。バ。竹。の。末。堀。の。向。ひ。へ。な。び。さ。り。伏。く。や。あ。く
と。淵。の。上。と。越。て。ぐ。り。夜。ハ。い。ま。深。く。疾。湊。の。方。へ。走。り。て。便。船
と。求。む。べ。し。と。た。だ。る。ノ。浦。辺。と。さ。り。て。行。程。小。夏。の。夜。も。やく。明



阿新丸
 父の敵
 本間
 三郎
 討て
 身を
 遁く
 園



其二





其三

離れて。忍ぶべき道もなれば。麻蓬の生茂りたる中へ身と隠す。日
の暮と待所。追手の者と覺して。百四五十騎土埃を擧て馳
近き若十三計。児や通つると。道を行合人毎に問声
て。過行る。阿新の膽と冷し。猶草深く身とひそめて。其日と
くし。夜よなれば。湊へと心ざし。闇にうらまを踏へて。そとも
あふ。夜よなれば。行ふ。至孝の心と感して。佛神擁護の眸とや。四じ給ひ
ん。年老より一人の山伏。行合より。此児の有様と見て。何様事の子
細らんと思ひ。是は何地より何地と。さして御渡をいぞと尋ねられむ。
阿新隠すに及ばず。事の様と有の儘に語を聞申り。よぞ山伏。熟し
を承て痛しや。我此人を助く。汝は只今の程。可愛目と見るべしと。
大慈大悲の佛心と起し。御心安く思されし。湊へ商人船ども多
くは。乗奉て。越後越中の地まで送付ありと。阿新の手を取て

道と急ぎ。足たぬれば。肩は乗背小負て。ほろろと湊よこを行着る。
此時已に夜明くれれば。便船やあらと尋ねる。折節湊の内に一艘の船
も無り。こゝ如何せん。と心をつらて。求る所は。遙の沖へ乗らう。大
船順風は成ゆと。悦びて櫓を立達と。山伏目早く。これを見付。其船
是へ寄て。へへ。便船申え。と呼り手と上て。差招けども。斯迄乗出し
る。船と後へ戻す法やあらんと。曾て耳も聞入す。船人同音は。声と帆
み上て。湊の外へ漕出す。山伏大に腹を居か。いでく。目も物と見すべしと
て。柿の衣の裾と結びて。肩は懸。澳行船は立向つ。いづる。數珠とまき
と。押搦。一持秘密咒生々。而加護。奉仕修行者。猶如薄伽梵といへり。
況や多年の勤行。よ於て。や。明王の本誓。ちや。南無や。權現金
剛童子。天龍。夜叉。八大龍王。彼船。此方へ漕かへ。せて。さ。せ。いと。跳
上て。肝膽と碎て。そを祈り。行者の法力。神は通じ。明王感應

やいづひん。澳の方より俄小悪風吹来て。此船忽ち覆えんとしを
る。船人乗人ども大子周章驚きて。山伏の御房先我等と御助け
へと呼ぶく。手々に船と漕返し汀近く成くれ。船頭船より飛
下て児と肩より引かけ。山伏の手と採て屋形の内へ伴ひ入るれば。不
思議や風ハ元の如く吹直りて。船ハ湊と出ふる。ある所へ追手の
者ども百四五十騎。採りもんど馳来て。遠浅は馬と叩へて。其船止と
呼れども。順風ハ帆と揚る事なれば。更留ひべき様もつづ。船
の走る事箭の如く。其日の暮方に越後の府に著ふる。阿
新山伏の助。因て不思議。鰐の口の死と遁れり。全く天其
孝心と感ずると。明王加護の誓より。實に掲馬の駿とつべさるり
武家議事 誅俊基
助光收骨登高野山

か。近日常倉中して斬奉べしと。被定る。此人多年の所願在て
法華經と六百部自讀誦し。ひるが。今二百部残る。此願満る程の
命と相待れり。と頼み所望より。いふ。實も其程の大願と果るを奉ら
ざらんも罪也と。今二百部の終る程。僅の日數と存る命の程を哀
れる。此朝臣の年頃召仕れる。青侍は後藤左衛門尉助光と。し
者なり。主人召取れり。北方と伴ひ進る。巖峩の奥に忍て。以
ひるが。俊基關東へ下り。後。更其音信もつづ。され。北方ハ絶
ぬ思ひ。伏枕して。明暮に歎悲より。助光これを見奉る。不堪くれ。ま
く。諫め慰め。北方ハ御文と申勧め。是と携へて。密に鍾倉へ。下り。
路すが。朝臣ハ今日明日の程。斬れり。と聞へり。助光大に驚き。
心急ぎ。行程は。今ハ。や此世ハ無人。や成り。ひゆる。と。往逢人。事
の由と尋つ。端なく。鍾倉ふ。を著る。俊基朝臣の。お。傍ふ

と取出し頸の面りと押拭ひ其紙と推開きて辞世の頌を書給ふ

古来一句 無死無生 萬里雲盡 長江水清

筆と閣て髪を摩り人程こそうれ。太刀かけ後より光て首の前より
落ると自抱て伏し。是を見奉り助光眼もれ心も砕け計りて暫
地上より伏沈む。扱もつるべきはつるは散と葬を奉り。空より遺骨
と頸よりけ。形見の御文と身に副て泣く都へ上りたり。北方ハ助光と
待つて。辨殿の行末安否と聞き事の嬉しさに人目も憚らず。簾よ
て外より出迎ひ。つるや辨殿ハ何頃御上りあるべし。御返事ぞと問
うへ。助光もつくと涙を流し早斬れを給ふ。是こそ今ハの際
御返事とていと。髪を消息とと差出し。声も惜み伏泣く
バ。北方ハ餘りの事よりうれ果形見の文と髪を消息とて。押當て内
へも入給ふ。搦り伏轉びて。消入計り泣く。理る哉一樹の陰に宿一河

の流と汲人よ。別れとなれば名残と惜む習ひうら。況や連理の契で
浅くして十年余りも成り。此後ハ夢より外ハ相見ざり。此世の外
の別れうれハ絶入計り。ふと心中心中こそやをかこ。四十九日と申し形如
ふ佛事営て北方ハ様とて濃墨染し身をまつし。柴の扉の明れ
は亡夫の菩提と吊ひ。人の外より。助光も髪切て主の白骨を携へ
永く高野山に閉籠て深く菩提の道ふ入亡君の後生といひ奉
る。夫婦の契り君臣の因も。跡もさすでも留めて哀れとつ人も

天起怪異示前相

主上潜遷落内裏

嘉曆二年の春の比。南都大乗院禪師房と。六方の大衆と。確執の事
有て合戦よ及び。金堂講堂南圓堂西金堂忽は兵火の餘烟も焼
失ぬ。又元弘元年山門東塔の北谷争論の事より。兵火起て四王院

延命院大講堂法華堂常行堂一時は灰燼と成ぬ是等こそ天下の
横災と兼て示す處の前相と人皆魂と冷く同年の七月三日大
地震有て伊國千里濱の遠干瀉俄に陸地より事二十餘町也
又同月七日酉の刻に地震て富士の絶頂崩る事數百丈也是
唯事より予て卜部宿祢大龜を燒に占ひ陰陽の博十占文を啓
て考ふるに國王位を易大臣災は疊と有り勘文の表不穩尤も御慎
可有と密奏す南都北嶺の火災南紀東駿の地震只事は非ず今や
不思議出来りると君臣心と驚しり地震果して八月廿二日東使兩
人三千余騎して上洛すと聞へる近國の諸侯其由ハ去り改何なる
事ヤりゆんといふ我もくと馳登る程に京中以外は騷動す而使已
に京着して未文箱も開く先は何とて山門へ聞へる今度
東使上洛の事ハ主上と遠國へ遷し進らる大塔宮と死罪は行ひ奉

らんと一山とて沙汰しければ廿四日の夜よ入て大塔宮より潛り
御使と内裏へまゐりて今度東使上洛の事内く承てはハ皇居と遠
國へ遷し奉り尊雲と死罪は行ん為りてはる間今夜急ぎ忍びく
内裏と御開き在て南都の方へ落さるる速に城郭と構へ御合戦の
御用意可然存に若城墨調はる已前は凶徒南都へ寄来らんハ由
に御使大事しとてハ先一人の近臣は天子の號と許され偽て臨幸の
由と披露し山門へ登られぬ敵定て南都遷幸の事ハある敵山
よ向て合戦と致しはる去程より衆徒吾山と思ふ故に身命を輕
んじて防戦ひしべし合戦數日は及び敵攻あつて力疲れはる其間
に伊賀伊勢大和河内の官軍と驅催さる急に京都と攻まらん
ハ凶徒の誅戮踵と回すべし國家の安危只此一舉に可有也
早く御仕度可然存に由申送るをいければ主上ハ只つれを給

る計めて何の御返事やも及び給ふ。尹大納言師賢万里小路中
納言藤房同宰相季房三四人上御しる輩と御前より召れて此
事如何と被仰出くれば藤房卿進で申されたり様ハ逆臣君と犯
し奉らんとする時暫其難と避て還て國家と保ハ前殿皆佳例
てハ所謂重耳翟は走王支王幽は行共王業をなして子孫無窮
小光を榮しひひ事既急るり。鬼角の御思案に及びひり夜
深ひひるん。早く御忍びひへとて御車と差寄三種の神器と乗奉
て。主上と扶けて乗進も下簾より出給と出して女房車の体
は見え陽明門より成奉り御門守護の武士ども御車を押へて誰
もて御渡りひもと問申くれれば藤房供奉の前途は進まひたり
が。是ハ中宮の夜は紛れて北山殿へ行啓るを給ふると各へ申
されくれれば扱ハ子細ひりて御車と通しる。進て心得りる

源中納言具行按察使大納言公敏六條少将忠顕等三條河原
より追付奉る。是より尹大納言師賢卿ハ引別れて主上は替て比
叡山は登るべき旨と命せられ君ハ御車と上られ怪氣るる張樂は
召替させ進もりくれども俄の事して駕轡丁も無りくれれば北面
大膳大夫重康樂人豊原兼秋隨身泰の久武るんど御輿と昇奉
る。諸卿皆衣冠と解て折烏帽子は直垂と着し。七太寺詣て
す。各家の青侍かんの女姓と具足しる体は見えて御輿の前後
に付随入道と急ぐせひて古津の石地藏と過るひひる時。夜
は若くと明みくり。此より朝餉の供御と進め申て先南都の東
南院へ入る。此院の僧正元より戴心を忠義と存せり。先
臨幸の由と披露も。衆徒の心と伺ひ聞は西室顕實僧正ハ關
東の一族として権勢の門主なる間皆其威もや思れり。典力す

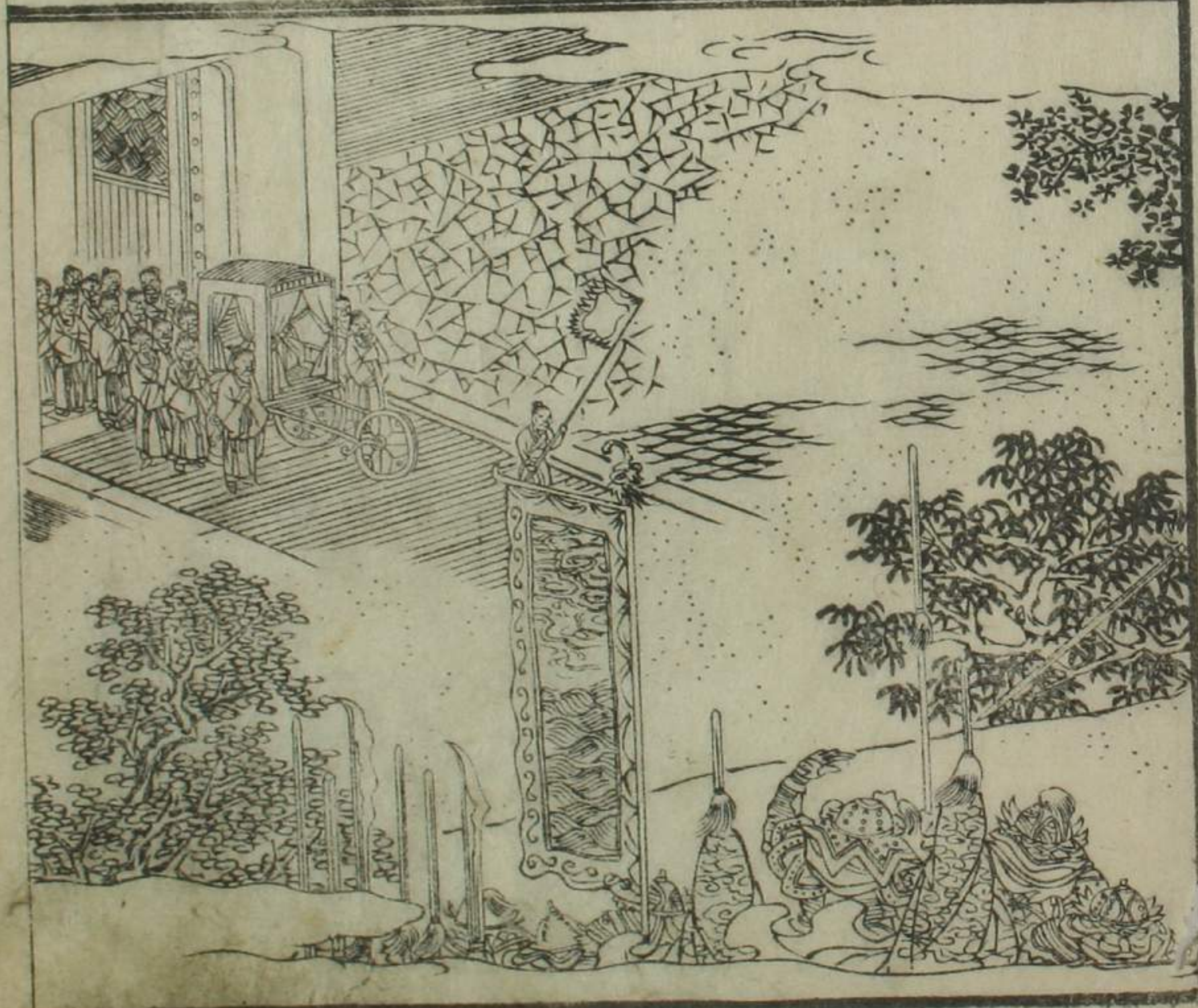
る衆徒多かりきりければ。かくて八南都の白皇居危しとて。翌廿六日
和東の鷲峯山へ入るひくれば。此ハ山深く里遠くれば。
何事の計畧も叶へず。万事自由の要害は御陣を召さしとて。
又廿七日潜幸の儀式を引くろひ。南都の衆徒少く召具せられ
て笠置の石室へ遷幸なりぬ。

偽臨幸師賢登叡岳

山門惡僧戰幸崎濱

扱も尹の大納言師賢卿ハ三條河原より主上より引違大塔宮の計
は隨ひ臨幸の由めて山門へ登り。衆徒の心も伺ひ又軍勢を催し
合戦在へしとて。法勝寺の前より衣籠の御衣と着して。瑤連よりの
山門の西塔院へ登り。藤中納言隆資同中将爲明源左中将貞
平皆衣冠と正し供奉のる相事の儀式誠しくそとより。先
西塔の釋迦堂と皇居と定められ。主上山門と御憑有る。臨幸成る。

披露有れば。山上坂本ハ申し及お大津。松本。戸津。比叡。辻。仰
木。絹川。和仁。堅田の者どもも。我前くと馳参程は其勢東西両塔は
充滿す。かきくれば。六波羅のいり。曾て是とあり。廿四日の夜明り
れば。東使兩人内裏へ参りて。先行幸と六波羅へ成奉ると。既打立
んとし。兩所へ淨林坊阿闍梨豪譽が許し。早打の使者来り。今
夜寅の刻は主上山門と御憑有て。臨幸成る間。三千の衆徒悉く
馳参ひ。近江越前の軍勢を待て。明日ハ六波羅へ寄るべし。評
定より。事の大い成りぬ。間も急ぎ坂本へ御勢を向られぬ。豪譽
後攻仕つて。主上を取奉るべしとを申越し。兩六波羅及び東
使兩人も。大い驚き。先内裏へ馳参て見奉る。主上ハ御座さす。と
司田女房達。此彼よきついで。泣声のぞし。扱ハ山門へ落さ
給ひ。こと子細なし。勢のつらぬ。其間ハ山門を攻め。四十八箇所の篝



尹師賢卿
 主上と
 詐る
 山門
 臨幸
 敵と
 の畚

漢の紀信
 高祖と
 詐る
 降参
 楚の
 項羽と
 敵の
 畚

天平二ノ七

の輩は畿内五ヶ國の勢を添て五千余騎追手の寄手として赤山の麓下松の辺へ指向。搦手へ伏々木三郎判官時信と大将として長井丹後守宗衡波多野上野前司宣道常陸前司時朝筑後前司貞知海東左近將監其外真野平井目賀多伊庭木村馬淵の輩は美濃尾張丹波但馬の勢を差添て七千余騎大津松本を経て唐寄より坂本と指て寄懸より山門へ兼てより相國を指しとせし。妙法院宮大塔宮の兩門主宵より八王寺より御屯在て御旗と揚りし。御門役の護正院僧都祐全妙光坊阿闍梨玄尊と始とし東西兩塔其外大津松本戸津比叡辻仰木絹川和仁堅田より三百騎五百騎馳奔る勢一夜の間は六千余騎と聞へくる。天台座主と始め一山の衆徒解脫同相の衣を脱堅甲利兵の貌を替て垂跡和光の靈山忽ち変して勇士守康の戦場と成りし事神慮の程何ぞいと計がくを覺へ

太平記

去程は六波羅の勢は戸津の宿の辺へ寄りと聞へる。南岸圓宗院中坊勝行房等早雄の同宿取物も取りし。辛騎の濱へ出合くる。其勢皆歩立ちて而も三百人あり過りければ六波羅の先陣海東左近將監是を見て敵の小勢より後陣の勢の重なる前懸りし。續けや者どもと云儘は真先馬を進め三尺四寸の太刀と接て鎧の射向の袖と指し。敵の渦巻て扣へる真中へかけ入敵三人と切伏波打際馬と立て續く味方を待りし。遙は是見て岡本坊の播磨の堅者快實と云悪僧前は突雙べり持楯一帖岸破と踏倒し二尺八寸の小長刀と水車は回して躍懸る海東是と弓手より曹の鉢と真二打破んと隻手打り打るが打外して袖の冠板より菱縫の板を片筋違り切て落す。二の太刀と餘り強く切んとて弓手の鎧と踏折己馬より落



辛寄の濱の合戦の図
海東九近將監が
一子幸若九父の
敵播磨の堅者
快實と刀を合す



其二

和介堅田の者も
小舟三百余艘を
大津へ漕廻し
六波羅勢の後と
裏くと謀り高



んとして急よ乗直んとしける。所と快實長刀の柄と取のべて内甲へ
鋒さ上りよ。ニツニアすき間もく突立くれハ哀しし海東喉をえと突
まて馬より真倒は落てぐり。快實聽て海東が上巻を乗懸り。髪を
綱引懸て首挫切長刀は貫きて武家の大将一人討取ら。物始りと悦
ひ嘲笑てを立ちりる。爰は何者とも知ず見物衆の中より年十五
六計る兒の髪を唐輪は上るが。翔塵の筒丸は大口の側高く採金つ
らその小太刀と抜て快實は走りり。曹の鉢をくく二打三打を打
らりる。快實屹と振返りて是を見り。齡二八計る兒の大眉は鐵漿
黒也是程の小兒と討留んいと安くれとも。法師の身を取てハ情なし
打しとすれば走り懸りく。手驚く切田る間よりくさハ長刀の柄は
て太刀打落し。組とんとりく所ハ比叡辻の者共。田の畔は立並で
射出す横矢。此兒胸板と頭射りて。矢場は伏て死より。後誰ぞ

と尋ねり。海東が嫡子幸若丸とふ者ミり。此度の軍に父と共に打立
んと申々り。海東強く止めて伴はざりければ。覺束々や思らん見物の者
ふ紛れて跡は付来ぬ。幸若年よりしとくも武士の家は生る事
なれば。眼前父の討ゆるを見て。同く其場をさす討死して。爰其名と
残るるを哀る。海東が郎等ハ二人の主と目の前は討せ刺し首を敵
ふ取れ。何面目は生て及んで。其首はとと喚り。三十六騎を双べ
快實目かけて討てり。快實めくくと打笑ひ心得ぬ事。序込達ハ敵
の首を取べきに味方の首をわらハ武家自滅の瑞相顯れり。もし
かば取すべしとて儘。海東が首を敵の中へかばと投懸。扱本様の拜
切八方を拂て火と散せば。三十六騎の者も快實一人は切立て。馬の
足を立り。物大将伏し木時信これを見て。云甲斐かき者ども
哉誰ら。彼惡僧を打とれと下知られハ。伊庭目賀多木村馬淵

が輩三百余騎呼て馳寄快實と中より討取んと切
結ぶ。快實十分危うと見へる。桂林坊悪讃岐中坊小相摸勝
行坊侍後聖者定快金蓮坊伯耆直源四人左右より渡合て鋒
とさし合し。六波羅勢と切て叩り讃岐直源の両僧同ト枕し闘死
す。是と見て後陣の衆徒五十餘人又抜連て討て懸り快實小相
摸定快と救ふて追つ募つ攻戦ふ此幸寄の濱と申ハ東ハ湖
て其汀崩れり。西ハ深田とて人馬の足立次平沙渺として道
せむぐれば後へ取らんとすも叶り守中より取らんとすも叶り守
されバ衆徒も寄手も互に面み立ちる者あり戦て。後陣の勢
ハつづつに見物してぞ聲へる。已に唐寄は軍始りぬと聞へる。巴
兩宮内門徒の勢三千余騎白井の前と今路へ押出す。本院の
衆徒七十余人ハ三宮林と下降り。六波羅勢の横合と討んと進

近づく。和仁堅田の者昔ハ小船三百余艘より取乗て其後と遼んと大
津とさして漕回す。六波羅の勢これを見て前後に敵と受てハ叶ハ
ヤ思ひん。滋賀の闇魔堂の前と横切。今路へ懸て引及す。衆徒ハ
元より案内ハく知り。今路の此彼より走り。逼り合ふ落合て散
り射立たり。六波羅勢ハ皆無案内の道よりさしかり。堀谷ともいふ
馬と馳倒して引もろる間。後陣より引くる真野入道父子二人平井
九郎主従二騎。海東の若黨八騎。波多野が郎等十三騎。谷間
と討り合ふ。佐々木時信も馬を射りて乗替と待程は早敵
の大勢より左右より追取巻れ。既し討れぬべく見へる。名を惜
命と輕んずる若黨返り合てく。所くして討死し。其間より万死と出
て一生の遇。這くの躰より逃及びられ。赤山の方へ寄る追手の勢
も是より聞怖して早く京へ引返り。此頃より天下久く静して

軍と事ハ敢て耳も觸ぎしに。俄よの珍事起ゆれば京中の男女周章騒で。天地も今に打返す様ふ。沙汰せん所しなありけり。

眩幸非實山徒變虚

両門主退ハ王子屯

如斯世上乱る時節うれバ。野心の者どもの取進する事りやとて。昨日廿七日の己の刻よ。持明院本院春宮兩御所六條殿より六波羅の北方へ御幸より奉り供奉の人くふハ今出川前右大臣兼季公三條大納言通頭卿西園寺大納言公宗卿日野前中納言資名卿坊城宰相経顯卿日野宰相資明卿等皆衣冠よを御車の前後より相順ふ。其外の北面諸司格勤ハ大略狩衣の下に腹巻と著映しけり。洛中須臾小変化し。六軍翠花を警固し奉り世の中の有様皆人耳目と驚しけり。是ハ叔と山門の大衆ハ唐崎の一戦小打勝て事始し。喜と斜し。爰に西塔と皇居不被定条本院面目うに似し。

壽永の古へ後白河院山門と御憑りし時も。先横川へ御登山けり。臈て東塔の南谷圓融坊へ御遷幸せしけり。是先縦也且吉例也。早臨幸と本院へ成奉りべしと西塔へ申送ふ。西塔の衆徒理ふれ。速し仙躡と本院へ促し奉る。為ふ皇居に参列しけり。折節深山風烈し。御簾を吹上るけり。龍顔を拜し奉りし。如何天子よ。御座さす。尹大納言師賢卿の天子の袞衣と著し。其に有るれば大衆興と覺りて。何る天狗の所行ぞとて。此趣と本院東塔へも申觸りし。其後より一人の大衆。皇居へハ参りけり。角てハ山門何れ。野心とさし。計じとて。其夜の夜半計ふ。尹大納言師賢卿藤中納言隆資卿同中將為明朝臣等。忍びて山門と下り。主上の御跡と追て。笠置の石室へ参りし。西塔の臨幸如斯なるけり。淨林坊阿闍梨豪譽ハ元來武家へ心

と寄りし。大塔宮の執事安居院の中納言法印澄俊と生捕く
六波羅へ差出す。護正院僧都祐全ハ御門徒の中の大名人ハ五寺
の一の木戸を堅めし。角てハ叶とヤ思ん同宿手の者と引つれて
六波羅へ降参す。是と始とし一人落二人落落行る間。今ハ落の
輩光林坊律師玄尊妙光坊ハ相摸中坊悪律師と始め三百人ハ
過ぎり。妙法院宮と大塔宮とハ尚ハ王寺ハ御座り。此躰
よそハ悪かり。一ハ落延て君の御行末も承て重て計義と
回らべしと思召れ。廿九日の夜篝火と所く小焼て。大勢
の籠り。由見せ。夜半計は後臣及び落残る衆徒と召具
せ。戸津の濱より小船召れ。南とじて先石山へ落著る。人
此ハ兩門主御評議在て御連枝一所ハ落さる。事ハ計略遠
く似たり。其上妙法院宮ハ御行歩く。し。ハ轡此に

御忍び御座し。すべしとて石山より二人引別れ。妙法院並
置へ超さる。大塔宮ハ十津河の奥へと志して先南都の方へ落さ
る。止事。一山貫首の御位と捨る。未習を。ぬ
万里漂泊の旅。浮れ。事。山王醫王の結縁も是マ限りと
名残と惜ま。竹園連枝の再會も今ハ何事期す。と。御心細く
思食れ。互ハ御影の樹木ハ隔て隠る。も。傾り。泣く。双
方へ立別れ。御心の中を悲しく。抑今度主上實ハ山門へ臨
幸不成。依て衆徒の心忽ち変じ。一旦事。と。情事の様
と案する。是大塔宮の智謀不浅處。出。昔漢楚八箇年の戦。ハ
漢高祖楚の項羽が。為。榮陽城。圍。城中糧盡て戦。ハ力。遁
ハ道。張良が計を用ひ。高祖ハ面貌似。紀信。と。人臣と詐て高
祖と号し。其御衣と著。黄屋の車。ハ。高祖其罪と謝。楚の

陣しんに降くだ泰たいすと呼より。城しろの東とう門もんより出でる。楚しよの兵へい是こゝと見みて四面しめんの圍とりこと解といて皆みな東とう門もんに集あり萬まん歳さいと唱なげ其その間まに高かう祖そ三千さん余よ騎きと從したがへ城しろの西せい門もんより走あり成せい皐かうへを落おちりける。項かう羽う降くだる所ところの漢かん王わうと見みる。高かう祖そより其その忠ちゆう臣しん紀き信しんと人ひと者ものよりくれ。大おほに怒いつて逐おひ紀き信しんと燒やく其その後のち高かう祖そ大たい軍ぐんと調とへ却かへて項かう羽うと攻せむ。項かう羽う勢せいは盡つて終つり烏う江かうみして亡なびる。高かう祖そ長ちやうく漢かんの王わう業ぎやうと起おきて天てん下かの主しゆと成なり。大たい塔たつ宮みやうも懸かる佳きやう例れいを思おも食じき師し賢けんもケ様さまの忠ちゆう節せつと存ぞんずれ。彼かハ敵てきの圍とりこと解といて詐まり是こゝハ敵てきの兵へいと遮さらん。為なす謀まうあり。和わ漢かん時じ異いはれども君きん臣しん解とと合あはる如ごとし。誠まことに千せん載ざい一いつ遇ぐうの忠ちゆう貞しん頃きん刻くわく変へん化くわの智ち謀まうかき

南北太平記圖會卷之二



人の目下命を
今ぐ奉る

尚時

兩

義助

五

直義

五

則祐

兩